

宮座研究の歴史と現在

概念・当屋制・変化

上野和男

Mya-za Studies: Past and Present : Concept, To-ya System, and Change
UENO kazuo

- ① 問題
- ② 宮座の概念
- ③ 宮座組織の諸事例
- ④ 「当屋制」の類型と地域性
- ⑤ 結語

【論文要旨】

本稿は、主として西日本地域に神社祭祀組織として広く分布する宮座について、とくに中国地方と北部九州の宮座を取り上げ、これを近畿地方の宮座と比較分析して、宮座の構造とその地域的変差を明らかにするとともに、宮座の現代的变化についても考察しようとするのが目的である。

本稿で第一に論じたのは、宮座の概念についてである。本稿では、内面から、すなわち宮座の内部的な構造に立ち入って宮座を概念規定した。宮座は「一定の地域社会において当屋制を原理とする神社祭祀組織」である。宮座の内部構造に注目すれば、宮座は株座の形態をとるにせよ、また村座の形態をとるにせよ、対内的な家相互の平等性・対等性と、対外的な封鎖性排他性（ときには秘儀性）を特徴とする祭祀組織であると規定できよう。

第二は、宮座の地域的多様性の問題である。宮座の地域的類型として、本稿では「家当屋制」と「組当屋制」を提示した。家当屋制とは、宮座のメンバーである家々の当

屋順序を直接指定するような原理にもとづく当屋制であり、近畿地方の当屋制はこれにあたる。これに対して、組当屋制とは当屋順序がそれぞれの宮座メンバーの順序として直接指定しないで、地域、組などの順序に従って当屋の順序が間接的に規定している当屋制であり、兵庫県播磨地方以西の中国地方の宮座、北部九州国東半島の宮座がこれにあたる。

第三に、宮座の現代的变化の問題についても論じた。中国地方や国東半島の宮座を通して明らかなのは次の諸点である。ひとつは、とくに人権思想平等思想の普及による株座から村座への変化である。ひとつは祭祀費用負担方法の変化である。特定の当屋が負担する「当屋負担型」から、全戸で平等に負担する「宮座負担型」への変化である。現代の宮座研究は今後とも宮座のこうした現実を直視しなければならない。

【キーワード】 神社祭祀組織、宮座、当屋制、家当屋制、組当屋制

①問題

本稿は、長い歴史をもつ宮座研究史をふまえながら、主として西日本地域に神社祭祀組織として広く分布する宮座について、とくに中国地方と北部九州の宮座を取り上げ、これをこれまで活発に調査研究が行われてきた滋賀県、奈良県などの近畿地方の宮座と比較分析して、宮座の構造とその地域的変差を明らかにするとともに、宮座の現代的变化についても考察しようとする一試論である。とくに、本稿で取り上げる広島県山間部農村の宮座と大分県国東半島の宮座は、近畿地方の宮座とは異なる構造的特質が多く、したがって、日本の宮座は地域的多様性を前提として理解を進めることが必要であると考えられる。中国地方や北部九州の宮座でまず気がつくのが、当屋の周期の長さである。近畿地方では、当屋がほぼ一世代に一回まわる形が多いのに対して、中国地方や北部九州の宮座では、一回まわるのに一〇〇年以上かかる例も多い。これは当屋についての考え方が、近畿地方とは基本的に異なること、また、宮座の基本構造が異なることを示唆していると考えられる。本稿では、このような日本における宮座の構造的多様性に注目しながら、現代の宮座研究のさまざまな課題について考察してみたいと思う。

本稿において主として考察する問題は、次の三つである。第一は、宮座の概念の問題である。一九二〇年代から開始された宮座研究において、今日にいたるまで宮座の概念をめぐる研究者間にいくつかの基本的な見解の差異がある。この差異には、調査研究対象の地域的差異、専攻学問分野の差異のほかに、宮座を通して何を明らかにしようとするかについての差異などさまざまな要因が考えられる。最も大きな差異は、宮座を肥後和男（一九四〇）が提示した「株座」のみに限定するか、「村座」を含めて規定するかの差異である。また、宮座をそのメンバーに注目し

て外面から規定するか、内部構造に着目して内面から規定するかの差異も大きい。さらに、宮座組織のどの部分を宮座と規定するかの問題もある。定員制の問題はこれに関連している。また、宮座に関連して「当屋制」の概念についても検討したいと思う。中国地方の宮座についての報告では、「宮座は消滅したが、当屋制は残っている」との表現がしばしばみられる。したがって、ここで明確にしなければならないのは、「宮座」と「当屋制」の関係である。そのほか概念に関連して、宮座の構成単位としての「家」と「個人」の問題、定員制の問題、当屋の神聖性をめぐる問題などがある。

第二は、宮座組織の地域的多様性の問題、すなわち近畿地方の宮座とは異なる構造を持つ中国地方や北部九州地域の宮座について、それぞれの構造的特質を明らかにすることである。中国地方や北部九州の宮座でまず気がつくのが、当屋の周期の長さである。近畿地方では、当屋がほぼ一世代に一回まわる形が多いのに対して、中国地方や北部九州の宮座では、一回まわるのに一〇〇年以上かかる例もしばしば見られる。このことは宮座や当屋についての観念の差を予想させる。いまひとつ注目したいのは、明治以降の変化の中で、中国地方や北部九州の宮座が、当屋の順序を個々の家の順序として直接規定するのではなく、地区の順序、組の順序、家の順序のように二重、三重に順序を定めている宮座がしばしば見られることである。本稿では、中国地方の宮座の事例として、広島県三原市久井町の久井稲生神社の宮座、北部九州、国東半島の宮座の事例として、大分県西国東郡大田村（現在、杵築市）上杵掛の白鬚田原神社の宮座と永松の田原若宮八幡社の宮座をとりあげる。

第三は、宮座の現代的变化の問題である。中国地方や北部九州の宮座は明治以降、何度かその組織の改変を経験してきた。明治期の変化として、とくに注目したいのは、国東半島の宮座の変化である。国東半島では、明治後期まではジガン（神元）とよばれる有力家が順番に当屋をつ

とめていたが、明治後期の改変により神元を含む神元組が組織され、神元組が中心となって祭祀を行う組織に変化した。また、国東半島では、当屋の神聖性の排除も徐々に進捗しつつある。さらに祭費負担方法の変化、宮座儀礼の変化も著しい。一九六〇年代以降の経済成長、過疎化などにもなう変化が顕著なのは、久井稲生神社の宮座である。久井稲生神社の宮座では、メンバーが限定された株座形態をとってきたが、メンバーの権利を譲渡、売買する傾向が顕著になり、現在でも所有者が空席となっている座もある。その背景として考えられるのは、宮座の参加する人々の意識の変化であると考えられる。

本稿で取り上げる広島県・久井稲生神社と国東半島の宮座の調査は、二〇〇〇年から二〇〇五年にかけておこなわれたものである。本稿では、まず、これまでの宮座研究の中での宮座の概念の差異とその問題点について検討し、そのちに久井稲生神社と国東半島の宮座の概要を提示したのち、宮座の地域的多様性や宮座の現代的变化の諸相について考察したいと思う。

②宮座の概念

これまでの宮座概念についての批判的検討

始めに検討すべき問題は宮座の概念についてである。これまでの宮座研究史のなかで、宮座の概念についていくつかの対立軸があった。その第一は、宮座を特権的な祭祀組織として規定するかどうかについての対立である。

宮座研究の開始期に宮座を概念規定した中山太郎（一九二四）は、「宮座とは、其の神社の祭儀、及び経営に関し、他の信徒（若くは氏子）に比較して、特別な権限を有する氏子の組合を云う」と規定し、特権的祭祀組織としていち早く宮座を規定した。この規定は今日に至るまで、

宮座の概念規定の有力な流れとなっている。とくに、中世史研究者をはじめとする歴史学の概念規定に大きな影響を与えた。たとえば中世祭祀組織の研究に当たった萩原龍夫（一九七二）は、「神事執行について独占的な機能を氏子内部において持つ集団」と規定している。特権的祭祀組織に参加できる家とできない家との差異に注目し、宮座研究を通して、村落の階級構造や支配構造を明らかにしようとする研究にこの規定が多い。宮座を単なる祭祀組織としてではなく、村落構造を明らかにする手段という考え方が強いといえる。中世史の宮座研究者にとって対象とする宮座の中心は、中世の宮座であり、対象を限定すれば、妥当性を持つかもしれない。しかしながら、肥後和男（一九四〇）の村座論で明らかになように、現代の宮座までその対象を広げるとすれば、その妥当性はない。つまり、宮座を特権的祭祀組織とする概念規定は、宮座の一般概念としては成立しないといえよう。

特権的祭祀組織として外面から規定するこれらの概念規定に対して、内面から宮座を規定しようとしたのが肥後和男（一九四〇）である。肥後和男の宮座論の要点は次の三点である。第一は、宮座を祭典を目的とする「神事」組合であると規定した点である。この規定は、宮座の機能について規定したものであり、また「組合」という表現によって、構成メンバー間の対等性を規定しているといえる。第二は、「ある神社の氏子が定時臨時に場所を定めて集合し、座席について神を祀ることが宮座の基本的形式」と祭祀の形態を規定したことである。第三は、宮座には「株座」と「村座」の二類型があり、特権的な形態ばかりでなく、村の家々が等しく参加する形態も宮座の一形態として認めたことである。歴史研究者を中心とした特権的祭祀組織論に対して、村落レベルで対等的な祭祀組織も宮座に含めることにした点は画期的である。この背景には、近畿地方の宮座について大規模な調査を実施し、当時の宮座の現状を正確に把握した事実があるものと思われる。この肥後和男の宮座規定によっ

て、中世から現在に至るまでのさまざまな形態をとる宮座を、総体的にとらえて得るはじめての基礎が与えられたといえよう。

特権的祭祀組織としての宮座の概念規定を継承しつつも、より個人に焦点を当てて外面と内面の双方から宮座を規定しているのが福田アジオである。福田アジオ（一九九五）は、「宮座は、特定の地域社会において、その社会を守護する神仏を一座して祀るために、地域社会の成員のなかの一定の資格を有する男子を定員制を設けて組織したもの」と規定し、福田アジオ（二〇〇〇）は、「決められた一定の資格を有する人間が神仏の前に一座して祭を行う組織。……宮座は原則として頭屋制を伴うが、頭屋制は宮座を前提としない」と規定している。この二つの規定は微妙なずれをみせているが、前者の規定の要点は、「神仏を一座して祀る」「一定の資格を有する男子」「定員制」である。「一定の資格を有する」「定員制」と表現されている点は、宮座の外面的規定であり、特権的祭祀組織として宮座を規定しようとする考え方が濃厚に認められるといえる。「神仏を一座して祀る」という表現には肥後和男の影響が認められるが、一座して祀らない宮座も多いから、これを概念規定に含めることには疑問が残る。定員制についても同様である。定員制とは、「一〇人衆」「宮衆」などとよばれる一定の定員の宮座メンバーが含まれる組織であって、祭祀などの場面で可視的に認められる部分を意味しているように思えるが、宮座はこの定員に含まれないメンバーやすでに定員制の組織を離脱したメンバーも含む組織であるから、福田アジオの規定は、宮座組織の可視的部分に焦点を当てた規定ともいえる。問題は、この可視的部分のほかにはその基盤となる組織を含めた全体が宮座なのであり、可視的部分にのみ注目した概念規定では、それぞれの宮座の全体像を明らかにすることはできないであろう。また、このように宮座を概念規定した場合、どれほどの宮座がこれに該当するであろうか。福田アジオの概念規定は、当屋制についても触れ、「宮座は原則として頭屋制を伴うが、頭屋制は

宮座を前提としない」と規定した。当屋制と宮座については後に議論するが、福田アジオのこの規定で注目すべき点は、宮座の内部制度として当屋制の存在を認めたことである。いうまでもなく、当屋制は講集団などの村落組織にも見られるから、宮座に特有の制度ではないが、宮座の基本的な特徴が当屋制にあることを認識することは重要である。

宮座の概念規定のための諸問題

これまでの宮座概念の批判的検討によって明らかになったことは、宮座がどのような家々によって構成されるかを主として問題とし、外面から宮座を規定しようとする場合、多くは特権的祭祀組織として宮座を規定する傾向が認められたことである。これに対して、宮座を内面から規定しようとする場合、特権的祭祀組織に限定せず、対等的に構成されるものも宮座に含めようとする傾向があった。ここでは、これまでの宮座の概念規定を踏まえて、新たな宮座の概念規定を探って見たいと思う。そのためには、概念規定の前提についてさらに議論すべきいくつかの問題がある。

第一は、宮座の構成単位の問題である。宮座は顕在的にせよ潜在的にせよ、「家」と「個人」の二重性を基盤としているが、基本的構成単位は個人ではなく家族（家）である。しかしながら、宮座は家を単位とする側面と個人を単位とする側面の双方を持つ、複雑な構造を特徴としている。表1は、そうした宮座の基本構造を示したものであるが、それぞれの家は、まず家としてメンバーシップ（成員権）に関わる規制を受けメンバーとなる。家レベルでのメンバーシップの規制が株座と村座の問題である。特権的祭祀組織としての宮座規定はここに注目したものである。しかしながら、家としてメンバーシップを獲得すれば、家の中の個人が自動的にメンバーシップを獲得したり、更新したりするわけではない。家としてのメンバーシップがあっても、その中の個人は改めてメン

表 1 宮座の基本構造

	メンバーシップ	制度	システム
家	株座と村座 (分家、転入戸を排除)	家並順、一定順序、 帳面記載順など	長期的対等性システム (役割拡散)
個人	座入り(次三男・女性を排除、 婿は婿入り時)	臈次(座入順)、年 齢順、親の死亡順等	短期的上下設定システム (役割集中)

バーシップを獲得しなければならない。座入り儀礼の存在や、場合によっては次三男を排除するのは、個人に関わる規制が存在するからである。宮座は当屋制によって、当屋をメンバー間に巡回させるのが基本的原理であるが、当屋の順序を決める基準はさまざまであり、家レベルの基準と個人レベルの基準とがある。この二つは混同して理解すべきではない。輪番で勤める当屋を設定し、一定期間当屋にさまざまな祭祀的役割を集中することによって、宮座は短期的に見れば役割集中のシステムである

が、当屋を構成メンバー間に巡回させることによって、長期的に見れば役割拡散のシステムであるといえる。言葉をかえて言えば、宮座は短期的には上下関係設定のシステムであり、長期的には対等関係設定のシステムである。第二は、年齢階梯制(あるいは長老制)の問題である。宮座が年齢階梯制の原理によって組織され、年齢順に当屋が決定される例がしばしば見られる。しかしながら、表1に示すように、宮座の「年齢階梯制」は、家を単位とする宮座のメンバーに上下関係を設定する二次的システムであり、このほかにも座入り順や親の死亡順など二次的な当屋決定の基準はさまざまにある。高橋統一(一九七〇)は、当屋決定基準のひとつである年齢階梯制を宮座の基本原理として理解し、宮座を「祭祀長老制」として規定しているが、原理

とする祭祀組織ではない。

宮座の概念

以上の議論をふまえるなら、宮座の概念規定のための諸前提として以下の四点をあげることができる。①宮座の基本的構成単位は個人ではなく家族(家)である。②「株座」「村座」の双方を含める。③内面から概念規定する。このことは、宮座を成立させている内部制度に着目することを意味する。そして、「排他性」より「対等性」を宮座の基本として概念規定し、その意味で順番に当屋を勤めることを重視する。④双分制、年齢階梯制(あるいは長老制)は宮座の基本的制度ではない。

このような諸前提にしたがえば、宮座は「一定の地域社会において当屋制を原理とする神社祭祀組織」と規定できる。地域社会で共同で祀る神社の祭祀組織として成立しているのが一般的な形態である。ここに言う神社には、オコナイにみられるように、一部の仏も含まれるが、神社に限定したのは宮座概念の拡大を防ぐためである。また、当屋制を原理とする神社祭祀組織であれば、特権的祭祀組織か否かは問題ではない。

宮座の内部構造に注目すれば、宮座は株座の形態をとるにせよ、また村座の形態をとるにせよ、宮座は構成単位としての強固な家の独自性を基礎としながら、対内的な家相互の平等性・対等性と、対外的な封鎖性排他性(ときには秘儀性)を特徴とする祭祀組織であると規定できよう。

③宮座組織の諸事例

(1) 久井稲生神社の宮座

まず、広島県三原市久井町の久井稲生神社の宮座組織と宮座祭祀の概要について記述したい。久井稲生神社の宮座は、記録で確認できる限り

において、慶長三年（一五九八）から基本的な構造は変わっていない。しかしながら、宮座構成員の交代や運営組織の再編などいくつかの変化が認められ、特権的を持つ旧家を衷心とする宮座は今や大きな変革の時期を迎えているようにも思える。

久井稲生神社の宮座の歴史については、藤井昭「備後久井稲生神社の宮座の『名』について」（一九八〇）の優れた研究があり、本報告もこの論考を基礎としている。本報告は、久井稲生神社の宮座の特徴は何か、また、特権的祭祀組織の形態をとってきた宮座は、どのような変化を遂げるのか、を焦点として、久井稲生神社の現行の宮座を中心に他地域の宮座とも比較しながら考察したいと思う。

なお、久井稲生神社の宮座の調査は、宮座儀礼の観察調査、文書調査を含めて、二〇〇四年から二〇〇六年にかけて実施した。また、二〇〇六年には久井稲生神社の宮座祭祀を記録した民俗文化財映像資料「久井稲生神社の御当行事」も制作した。

①久井稲生神社

久井稲生神社は、現在の三原市久井町の大半の地域を氏子範囲とする杭荘の荘園鎮守社であった。現座の氏子範囲も変化はない。祭神は、宇迦之御魂大神^{のみたまのかみ}。五穀豊穰、牛馬の祖神、衣食住の守護神とされる。摂社に八重垣神社（七月、祇園祭）と冥府神社がある。現在の例祭は、一月一九日に近い日曜日に行われる。以前は九月一九日（さらに前は旧一〇月一九日）であった。例祭行事は、「御当行事^{おとう}」と呼ばれる。また、「場の魚」と称して、鯛を神に献上した後これを下げて、各座（見子座、領家座、地頭座）で金箸と包丁で調理したあと、刺身にして餅とともに座員に分配して直会を行う。

久井稲生神社の由緒書によれば、その起源は、天慶元年（九三八）、社家の秦氏が伏見稲荷神社の分霊を祀ったとされ、現在よりやや南に位

置する下津から天慶元年（九三八）に現在地に遷座したとされる。中世を通じて杭荘の領家は伏見稲荷神社であった。のち小早川敬平氏が戦国末期まで杭荘を支配した。その小早川氏は「大般若経」六〇〇巻を寄進している。下地中分の結果、領家が南半分、地頭が北半分を氏子範囲とすることとなり、領家座と地頭座の二つの座が成立したと見られる。明治四年（一八七二）に稲生神社と改称。昭和一〇年、郷社となった。久井稲生神社の氏子範囲の各集落では、久井稲生神社とは別にそれぞれの集落神社が祀られており、神社祭祀は二重構造をなしている。集落神社の祭祀でも、かつては久井稲生神社と同じような御当（宮座）の組織が多く集落にあったが、現在は江木集落の良（うしとら）神社に残されているのみである。

久井稲生神社の宮座に関する最も古い文書は、慶長三年（一五九八）の「稲荷御当之覚」である。この文書には当時の久井稲生神社の宮座組織、とくに領家座・地頭座の構成が記載されている。このほかにも近世から近代にかけてのいくつかの宮座文書がある。また、久井稲生神社には近代から現代に至る多数の宮座文書などが所蔵されている。この中で、特に注目すべき文書は、明治以降の宮座構成員の権利売買、譲渡を示す文書であり、近代における宮座の変化をこの文書によって明らかにすることができる。

②久井稲生神社の宮座組織 基本概念

久井稲生神社の宮座は「御当」とよばれている。その構成単位は、基本的に現在なお「名^{みょう}」であるといっている。名は一定数の土地と家々によって構成される社会的単位であり、名は、基本的に水系の源である溜池を所有する家を中心に、同じ水系の土地を持つ一〇戸程度の家々で構成される。このような溜池から最初に水が引き入れられる田は、

表2 東座と西座

	東座	西座	計
慶長3年(1598)	47名	49名	96名
寛永6年(1629)	46名	—	—
寛保1年(1741)	—	48名	—
現在	48名	48名	96名

「御当田」^{おとうだ}とよばれ、現在でも数多くの御当田が存在している。御当田は神聖なものとされ、御当田では、シメオロシなど宮座のさまざまな行事が行われる。したがって、神聖な御当田の所有者である「御当主」が名の中心となり、この家が名を代表して宮座のメンバーとなる。御当主以外の名の家々は「寄当」であり、したがって、名は御当主と寄当によって構成される。御当主が当屋（当番主）を勤める際には、寄当は御当主を補助する。このように宮座のメンバーとなっている名は「御当名」とよばれる。

しかしながら、現在の御当は、一九六〇年代に組織された「御当班」が中心となつて、祭祀が行われている。御当班は全部で一八班あり、各班は四一〇軒の御当主によって構成される。御当班は集落ごとに組織されている。御当班の家が当番主を

勤める場合、同じ班の他の家々は援助する。御当班はいわば、御当主の互助組織である。このように、現在の御当は、宮座メンバーとしての権利をもつ御当主で組織する祭祀組織であり、家々と一定の土地で構成される名を必ずしも基盤としてはいない。すなわち、土地を基盤とした祭祀組織から祭祀の権利をもつ家々の集合体へと久井稲生神社の宮座は変化しているといえる。

座の構成

久井稲生神社の宮座は、文政年間に編制された『芸藩通誌』に「社人

と称する者九人。禰宜巫子等一八名」「天曆年間に定る所の祭事神遊等の旧儀を記せしを見るに甚厳整なり。今も祭時に庄内八村の民、故家のもの九十六名、社殿東西に座別を分ち祭儀に与る、殿内にて紅魚を撃て神供とす、昔より包丁の家ありて、古式を守るといふ」と記述されているが、この特徴は現在も同じである。

現在の久井稲生神社の宮座は、見子座、東座（領家座）、西座（地頭座）の三座で構成される。

見子座は、神主以下の社家、総代の座とされ、構成メンバーは家筋によって決まっている。東座、西座と異なり、御当田の所有を要件としない。すなわち土地を基盤としない座である。現在一八戸で構成される。このうち七戸は御当田を所有しない家であるが、一一戸は御当田を所有し、東座、西座の構成員でもある。このことは、久井稲生神社（一九六八）『宮座「御神酒献備之古式」（詳解）』で重複を確認できる。見子座の当屋は、十千で割当てられ、毎年二戸ずつ当番主をつとめるが、戸数が二〇戸に満たないため十千が不足しており、暦どおりには回転しないのが現状である。見子座の座頭は、久井稲生神社の宮司がつとめる。座頭は御当行事の座（現在は神楽殿でおこなわれている）において、正面の最も高い座に着席し、座の行事は座頭の差配で行われる。

一方、一般の農民の座である領家座と地頭座は「御当田」を所有することが基本的に参加の条件となっている座である。慶長三年（一五九八）の「稲荷御当之覚」に記録されて以来、現在に至るまで両座ともほぼ四八名、ないし四八軒で構成される（表2）。この両座の構成員は地域的に明確に区分されているわけではないが、どちらかといえば、領家座は東南部分、地頭座は西北部分の家が多いところから、東座、西座と呼ばれることが多い。近世村落以降の集落との関係を見ると、集落の全戸がいずれか一方の座に所属する例が五集落、両座に所属する形をとる集落が三集落となっている。分属している三集落のうち一集落をのぞいて、

多数の家がいずれかの座に所属する形をとっている。したがって、座の構成と近世村落の範囲との間には、強い関連がある。

東座、西座の当屋は、毎年二軒ずつが割り当てられ、四八軒が十二支の二回転二四年で一巡するから、各家はいつ当屋を勤めることになるかが明確に意識できる。現在、両座を実質的に差配しているのは、久井稲生神社の宮司であるが、宮司は毎年、当番を割り当てた二四年分の当番表を作成して配布している。この表には、御当名の名前と一〇月の御当行事の際の座順が記されている。御当名は「のりむね」「さだとも」など慶長以来の御当名が使われており、また座順は各家について、「正面」「正面より左側8」などと書かれている。この地域の宮座の当屋順は十干や十二支によって割り当てられているが、東座、西座の四八軒という数は、十二支による当屋の割り当てに都合のよい数といえる。

東座、西座のそれぞれには、座頭と触れ頭の役がある。いずれも家筋によって固定されている。座頭は座を代表する者であり、東座は「貞久名」、西座は「国時名」が固定的に勤める。御当行事の座の直会においてはもっとも高い座に着席することになっているが、最近の御当行事では、欠席する座頭もいる。触れ頭は、東座は「光宗名」、西座は「助年名」が勤める。触れ頭の役割は重要であり、「御当名帳」を持ち、毎年の当番主を定め、その旨を座員に触れる。また、当番主の勤めの一切を指導する。東座、西座の組織は、固定的な座頭、触れ頭の下で、毎年交代する当番主が当屋を勤める体制で祭祀が行われる。御当行事にあたっては、座頭、触れ頭のほかに、御当主（座員全員。座頭、触れ頭も含む。御当名を有する家）、据え方（各座二名。腕力ある者。鯛をまな板に乗せ、包丁方の前に据える役）、包丁方（特定の家の世襲。鯛を金箸と包丁で料理する役）、餅切り役（各座一名。特定の家。神饌の餅を切つて座員に配る役）、給仕人（各座二名。青漬菜、なます、酒などを給仕する役）などが参加する。

③ 個別集落の神社祭祀組織

久井稲生神社の氏子範囲の地域では、久井稲生神社の祭祀とともに各集落の神社の祭祀も行われ、神社祭祀は二重構造をもっているが、各集落の祭祀組織も久井稲生神社と同じ御当制度によって行われる例がある。現在、集落神社で御当制度を保持しているのは、江木の艮神社のみであるが、最近まで下津八幡神社の祭祀にも見られた。江木は久井町を中心で商店なども多く、かつての町営住宅もあり、外来者も多い。したがって、江木の四一九戸（二〇〇五年現在）のうち一八戸が御当を構成し、毎年交代で二軒ずつ当屋を勤める。当屋は十干によって割り当てられており、やはり久井稲生神社宮司が毎年作成する表によってその順序を確認できる。しかし、艮神社の場合にも十干に必要な戸数を欠いているので、一干が欠けている。

集落神社の御当制度がどの範囲に及び、いつごろ廃止されたかは現在のところその詳細を確認できない。しかしながら、集落神社の祭祀組織においても当屋制を中核とする宮座の形態をとっていたことは、この地域の神社祭祀組織として広範に宮座が存在したことを示すものに他ならない。また、集落神社における宮座組織の廃止は、久井稲生神社の宮座の変質とも関連しており、この地域の宮座の変化を明らかにする上で、その分析・考察は重要であるといえる。

④ 宮座組織の最近の変化

久井稲生神社の宮座は、少なくとも慶長三年以来、その基本構造には変化がないが、さまざまな点で著しい変化は見られるのも事実である。最近の変化は、次の四点に集約できる。

第一は、座の権利の売買・譲渡の活発化である。座の権利の売買・譲渡は、古くは明治期から行われていたとされるが、とくに活発に売買・

譲渡が行われるようになったのは最近である。久井稲生神社の宮座のメンバーは、基本的には神聖な御当田の所有者であったが、御当田の所有権の移動にともなって座の権利も移動することになった。祭祀経費の負担に御当主が耐えられないというのが最大の理由のようであるが、この他にも後継者がいないなどの理由で権利が売買・譲渡される。この場合、宮座メンバーの権利がかなりの高額で売買されることもあったという。譲渡・売買が行われる場合には、当事者が書類を作って久井稲生神社に届出る。この背景には、かつて御当を構成していた、いわゆる旧家の没落、退転も影響している。この段階では、御当田の所有権が宮座メンバーであることの基盤をなし、宮座の権利を得ることによって祭祀の特権を得る意識が濃厚に見られたが、最近は御当田から離れた場所の居住者が権利を購入したり譲渡を受ける場合もあり、御当名と御当田の所有者の分離という深刻な事態が起きている。最近では、権利の譲渡を久井稲生神社宮司が仲立ちする場合もある。宮司が作成する毎年の「御当主名簿」に「交渉中」という記載が見られるのはこのためである。

第二は、新たな「御当班」の組織化である。かつて久井稲生神社の祭祀は、御当名を構成する御当主と寄当が祭祀を担当していたが、御当主の経済力が衰退し、寄当が離脱した結果、御当主を中核とし寄当がこれを援助するという体制では祭祀を執行することが困難な事態となった。そこで、一九六五年に御当班が組織された。御当班は、四〇一〇戸で集落ごとに構成された。したがって、東座・西座の御当主が混在する班もある。班のメンバーが当番主になると、他の班員は当番主を援助して祭祀の執行にあたる。御当班の組織化によって、祭祀の執行は危機的な状況を脱することとなった。

第三は、祭祀経費の調達法の変化である。久井稲生神社の御当は、「当番主負担」を基本として祭祀を執行してきたが、最近では、当番主のみに負担をもとめるのではなく、宮座を構成する全戸が毎年費用を負担しあ

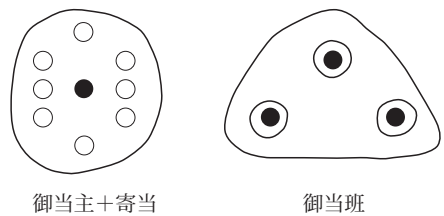
う「全戸負担」に変化している。すなわち、見子座では一、〇〇〇円ずつ共同出資しているし、東座・西座では、九六戸が一、〇〇〇円ずつ負担するほか袴の共同購入代金として一、〇〇〇円ずつ集めている。祭祀費用を毎年、全戸で負担する方式は、各地の宮座でかなり一般的に起きている変化であるが、久井稲生神社の御当もその例外ではない。

第四は、祭祀執行方法の変化である。一般的に宮座においては、座の運営や祭祀の執行は、神社そのものではなくて座に任される例が多いが、最近の久井稲生神社の御当行事は、久井稲生神社の宮司が差配して、久井稲生神社によって行われるという色彩が濃厚である。一〇月の例祭の前には、神社が召集する「執行評議会」が開催され、この会議で御当行事の進め方についての協議が行われる。この会議では、宮司、氏子総代、当番主など御当行事の関係者が出席する。また、御当行事は各座の直会が中心であるが、座席がきめられているにもかかわらず、最近では欠席者が非常に多い。神社では、こうした座席には宮座メンバー以外の着席を認めているが、かつての祭りの賑わいは今はない。欠席者の増加の背景には、宮座メンバーの特権意識の衰退があり、逆に御当行事への出席を負担と感じる家が増加している。特権的祭祀組織として構成されている久井稲生神社の宮座にとって、このような事態は、危機的な状況であるといえよう。

⑤久井稲生神社の宮座の特徴

これまで久井稲生神社の宮座組織の概要について述べてきたが、最後にその特徴を列記して結びとしたいと思う。第一は、久井稲生神社の宮座は、何よりも「名」を基盤とした特権的祭祀組織であることである。この特質は、数々の変化を経ても基本的に変わっていないが、特権意識の希薄化などによって、中世的な宮座は、いま存亡の危機に瀕しているといえる。第二は、久井稲生神社の宮座が、〈名中心の祭祀〉から〈御

図1 久井稲生神社の宮座の変化



当主中心の祭祀へ変化しつつあることである。一九六〇年代までは、御当主とこれを援助する寄当の協力のもとに御当行事はおこなわれていたが、一九六〇年代に東座、西座を越えて組織された御当班が、御当行事を担うようになり、名を中心とする祭祀組織は部分的に崩壊した。これは宮座の権利の売買・譲渡が活発となり、御当主と御当の地縁的関係も崩壊したことが背景にある。第三は、しかしながら、御当の各座の直会など御当行事の祭祀形式は比較的に維持されている。祭祀経費負担方法は当番主主体から全戸負担に変化した。このことは、久井稲生神社の宮座において、宮座メンバー間の長期的対等関係の維持が困難になってきたことを示している。久井稲生神社の宮座は、時代の変化の中で、現在、安定性を失っているのが現状である。

(2) 白鬚田原神社の宮座

北部九州地域にも広く宮座が分布している。ここで取り上げる国東半島も宮座の濃厚な分布地域である。北部九州の宮座については、古くは古野清人（一九四〇）の報告がありその後も調査報告が蓄積されてきたが、この地域の宮座を基盤とした宮座理論の提示はないといっている。ここでの問題は、国東半島の宮座が近畿地方の宮座といかに異なるかである。まず、大分県杵築市上杵掛の白鬚田原神社の宮座である。

宮座組織

白鬚田原神社は、滋賀県の白鬚神社を勧請したとされ、上杵掛、下杵

掛の二集落と、別の川筋に位置し、やや離れて位置する釜口、石丸の四集落で祭祀する神社である。白鬚田原神社の祭祀組織には、一九五八年までは隣接する下杵掛（約六〇戸）も参加していた。したがって、下杵掛にも八つ神元組があり、祭祀には神元組代表を出していた。しかし、下杵掛が独自に山神社を祀って以後、白鬚田原神社の祭祀組織は上杵掛集落（約七八戸）単独で構成されることとなり、したがって、祭祀は上杵掛の宮座組織によっておこなわれている。ともに祭祀しているとされる釜口、石丸集落は区長や楽人を送るのみとなっている。下杵掛は現在、白鬚田原神社の祭祀にまったく参加していない。

白鬚田原神社の祭祀組織は、大きくは神官、神社役員、神元組で構成される。神元組が宮座である。神官には、宮司、神職、弁官の別があり、宮司、弁官は一人ずつであるが、神職は祭祀時に他の神社から五〜六人が加わる。弁官は近在の集落から来る人（神職ではない）で、白鬚田原神社の重要な鍵をもっており、この人が参加なくしては祭祀を営むことができないとされる。神社役員としては、氏子代表（二人）、惣代（三人）、神饌所（一人）、精進人（三人）がある（かつてはこのほかに馬乗一人がいたが、現在はない）。このうち、惣代は上杵掛を構成する三つの村組（「平」ひらとよばれる）から一人ずつ出る。惣代のうちの一人は「担当」と呼ばれ、会計を担当する。このように白鬚田原神社の祭祀組織では、平がさまざまな役選出の基盤となる。平は現在三つあり、穴野平（二二戸）、岡平（一九戸）、立平（二六戸）となっている。神饌所は供物を調製する役で、最近ではほぼ一定の人に固定されている。精進人の三人は、各平から一人ずつ出る。「カドを押す」と表現されるように、順番は家並み順である。各平の戸数にもよるが、おおむね二〇年前後にまわってくることになる。神社役員のうち氏子代表は平服で祭祀に参加するが、惣代、神饌所、精進人は神官の服装で参加する。宮司、神職、弁官は祭祀の司祭者、神社役員はそれを補助する役割ととらえることができる。

表3 神元組の構成と祝元の順序

神元組	立平	穴野平	岡平	下沓掛
提灯方	4 (1999)	4 (1985, 2000)		
幕方	3 (×)			○
場錢方	4 (1996)			
衣装方	4 (1990)	5 (1994)	4 (1995)	○
流鎗馬方	2 (1987)			
七五三方	6 (1993)		4 (1989)	○○
駕与丁方		4 (1988)		
楽人方		4 (1991)	4 (1992)	○
繰出方		5 (1997)	5 (1986, 1998)	
幟方	3 (×)		2 (×)	○ (戦前)
幣串方				○○
計	26 (7 組)	22 (5 組)	19 (5 組)	8 組

資料:『神官名簿』(白鬚田原神社)

宮座である神元組の構成は、表3に示すとおりである。現在、上沓掛の神元組は全部で一七組である。神元組が構成されたのは、明治四十一年(一九〇八)の祭祀組織の改変によってである。明治四十一年以前は、有力家である神元が順番に祭礼を執行し費用を負担してきたが、明治四十一年に総神元と称して、旧来の神元を中心にすべての家を組織して、一八組とされる神元組を構成し、以後、この神元組が順番に祭礼を執行する体制となった。総神元とは特定の家ばかりでなく、上沓掛のすべての家が神元となることを意味する。つまり、明治四十一年の宮座組織の改変は、「株座」形態の宮座から「村座」形態の宮座への変化ととらえることができる。明治四十一年以前の神元を示す資料として、「神官原簿」(弘化三年、一八四六年)がある。この資料からは、神元の家数を確定することはできないが、ほぼ一八軒前後と伝えられている。現在の一七組の神元組を各平ごとに見ると、立平(七組)、穴野平(五組)、岡平(五組)となっており、また、各神元組に所属する家数を見ても二戸から六戸のばらつきがある。このことは後にのべる当屋がまわってくる間隔に影響している。

神元組にはそれぞれの役割があり、その役割にしたがって、提灯方、幕方、場錢方、衣装方、流鎗馬方、七五三方、駕与丁方、楽人

方、繰出方、幟方などの名称がついている。場錢方は祭礼の際の出店から寄付を集める役である。流鎗馬方は、かつて行われていた流鎗馬の場を取り仕切り、流鎗馬を勤める役であるが、流鎗馬の廃止にともない駕与丁方に役割を変更している。このように神元組は役割を分担しながら、祭礼を執行することになる。神元組の所属は固定しており、したがって同一の家族は代々同じ役割を担うことになる。

神元組は交替で祭礼の執行にあたる。その順番はやや複雑であり、図2に示すように平の順序、神元組の順序、家の順序の三段階で当屋(祝元)が決定される。この順序については、資料上、一九四八年以降は確認できる。少なくとも平は、穴野平、岡平、立平の順であり、各平の中の神元組の順番、家の順番もそれぞれに決まっている。平と神元組の構成戸数に差異があるので一定ではないが、穴野平では一五年かけて神元組をまわることになる。同様に岡平も一五年、立平は神元組の数が多いので二一年かけてまわることになる。

当番となった神元組は組のメンバーが協力して祭礼の執行にあたるとともに、祭礼の執行の中心となる祝元はおりもとを順番に従って決定する。祝元を勤める家の順番は、各神元組で定められている。図2に示すように、二〇〇〇年には穴野平の提灯方の神元組(四戸で構成)の一軒が祝元を勤めたが、この家につき祝元がまわってくるのは、六〇年後ということになる。立平の七五三方では実に、一二六年に一度となる。祝元を出す神元組をホオリモトジガンという。

祝元はかつての神元の役割を担うことになる。祝元の家には幟がかかげられ、祭礼の開始に当たって氏子代表が、「白鬚三柱明神」とかけられた掛軸を持参して祝元の家の床の間に掲げる。祝元のこのほかの役割として重要なのは、濁酒の製造と神元座の差配、参拝客の接待などである。祝元は所属する神元組の助けを得てこれを行う。また、同じ平のほかの神元組はスケと称して、当番の神元組を支援する。このような祝元の役

表 4 白鬚田原神社祭礼概要

9/25	醸造始め	深夜より米を蒸す。仕込み神事。
10/08	口開式	口開式神事。税務署検査。
12	霜けし	神元座① (A 神元組代表+神官+役員+区長)。桂川で禊ぎ神事。禊ぎ(7人)。 神元座② (A)。禊斎式神事。ハケオロシ。
16	潮汲み	豊後高田の浜。精進人。
17	前日祭	神事。神元座③ (A + B 神官・弁官+惣代・神饌所)
18	例祭	例祭神事。神幸祭(お旅所へ神幸)。神元座④ (③に同じ AB)。
19	ハケアゲ	注連縄・幕の撤去。祝元組の直会。

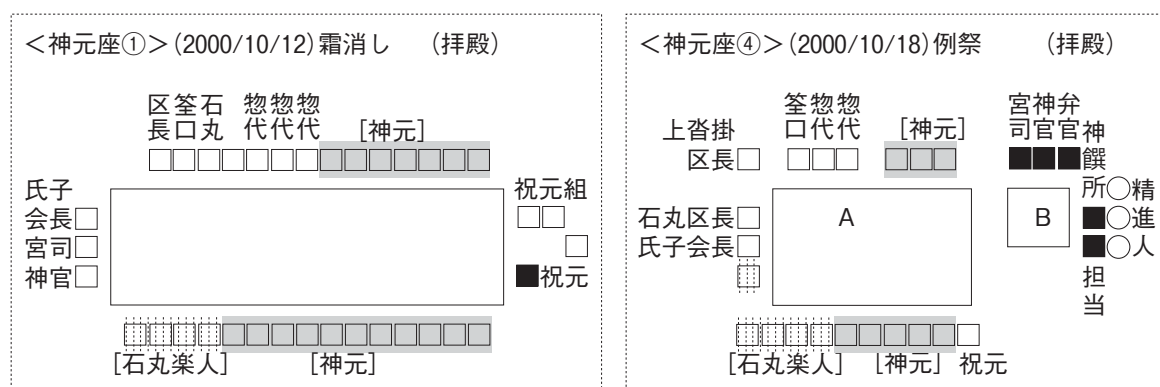


図 3 神元座

は例祭当日で、一〇時から神事があり、神を神輿に移した後、お旅所(従来は神社と真向かいの山の中にあつたが、神輿を担ぎ上げるのが難しくなつたので、二〇〇一年から平地に移した)までの神幸祭が行われる。夕方、神輿が白鬚田原神社に戻ると拝殿で第四回目の神元座が営まれる。翌一九日に後片付けと、幟の撤去が行われて、例大祭は終了する。

ここでこの例大祭を神元座に注目してさらに考察してみよう。神元座は一七の神元の代表が着座して営む座であり、宮座としての白鬚田原神社の祭祀組織の中核をなす座であるが、最近は欠席する神元や女性の参加もある。すでに述べたように、白鬚田原神社の例大祭では、四回にわたって神元座が営まれる。神元座の座には二種類ある。ひとつは、一〇月一二日の霜消し行事に行われる神元座で、若干異なるが、基本的には神元の座でありこれに宮司、神官、氏子会長などが参加する形をとるものである。いまひとつは一〇月一八日の例祭に開催される二回の神元座で、神元を中心とする座に宮司、神官らの座が別に設けられる神元座である。一〇月一二日の神元座を図3(左図)によって見ると、正面に宮司、神官、氏子会長が着座し、両脇に惣代、神元、上沓掛区長、釜口区長、石丸区長、石丸楽人が着座する。神元については、座順はきめられていないが、神元が着座する範囲は決められている。この神元座の全体的な差配は宮司が行い、どぶろくなどの接待は祝元と祝元神元で行う。座は、宮司の「これより霜消しを差し上げます」の言葉で開始される。この神元座では、どぶろくが振舞われる。二回目の神元座の参加者も第一回目とはほぼ同じである。二回目も宮司が差配し、祝元と祝元神元が給仕する。二回目には、仕出し弁当が出される。

一〇月一七日、一八日の二回の神元座は、これとは参加者、座順も異なる。図3(右図)に示すように、向かって左側に、氏子会長、神元、祝元、惣代(二人)、上沓掛、釜口、石丸各区長、石丸楽人が着座し、右側に宮司、神官、弁官とこれを接待する精進人、神饌所、惣代(担当)

が着座する。つまり、神職の座と宮座である神元の座が別々に設定されるのである。神職の座では、餅と大根の漬物を載せたお膳が出されるが、神元の座には膳はない。神元の座には座の進行中に餅と大根の漬物が出される。この座の全体的な差配は宮司によって行われるが、接待は神職側が惣代、神元の座の側は祝元と祝元神元が受け持つ。この神元座をみると、神職側の座と神元側の座が個別性を持ちつつも、ある時から合体されたようにおもえる。

(3) 田原若宮八幡社の宮座

つぎに上杓掛の北側に隣接する永松集落(三八戸)の田原若宮八幡社の宮座組織について検討してみよう。白鬚田原神社の宮座組織と同じように、田原若宮八幡社の宮座組織でも明治末期に大きな改変があり、神元の祭祀から神元組の祭祀に変化するとともに、大正末期には、当屋中心の祭祀から宮役と呼ばれる集落の祭祀役員中心の祭祀に変化し、宮座組織の変化がさらに著しい。田原若宮八幡社はかつての荘園領主であった宇佐八幡を分祀したとされ〔石井進一九九五〕、田原荘宗社とされるが、現在の氏子は永松集落に限定される。一月二日、三日に行われる例祭に参加するのも、ほぼ永松の氏子のみである。

田原若宮八幡社の祭祀組織は、神官、神社役員、神元座、祝元組で構成される。神官は祭祀時に田染八幡神社の宮司が来て、祭祀にあたる。神社役員は氏子代表(一人)、宮役(三人)、馬乗(二人)で構成される。このうち宮役は、大正一二年(一九二二)ころから新たに作られた役職であり、これ以降、徐々に田原若宮八幡社の祭祀は神元座、祭座から宮役に移行したものとみられる。これを決定的にしたのが、昭和二十一年(一九四六)の祭座の取りやめである。『明治三十八年以降 田原若宮八幡社例祭控簿』(一九〇五年)の昭和二十二年の記事に、「昭和二十一年大祭より氏子の協議により祭座は取止めに決定し、すべての大祭の諸準備は

氏子惣代及び宮役により神社に於て施行することに決す」とあるのがこれである。現在の田原若宮八幡社の例祭は、宮役、とくに宮代官を中心として行われ、神元組、祝元組は祭祀準備の下準備を担うにすぎなくなっている。

宮役三人のうち一人は「宮代官」と呼ばれ、田原若宮八幡社の祭祀をすべて取り仕切る。ほかの一人は「御供所」とよばれ、供物の調製に当たる。本殿脇にある御供所は、女性の立ち入りが禁止される神聖な場所とされ、ここで神饌や神元座の膳などが調製される。三人目の宮役は「鳥追い」とも呼ばれ、宮代官を補佐して儀礼の遂行にあたる。田原若宮八幡社の祭祀に当たっては、宮役は神主の装束をまとい、ときには宮代官が境内末社の祝詞を奏上することもある。これらの事実からみて、現在の祭祀においては、宮役の方に神聖性を認めることができる。これは田原若宮八幡社の祭祀における大きな変化である。「馬乗」は、現在は一・月三日の馬揃えの神事に参加するのが唯一の役割であるが、かつては流鏑馬行事の担い手であった。

つぎに、明治三十八年以後組織された神元組について見てみよう。田原若宮八幡社文書のうち、『明治三十八年以降 田原若宮八幡社例祭控簿』(一九〇五年)によれば、以前は一七軒の神元が順番に祭祀の中心となる「祭座」となり「寄子」の助力を得て祭祀を実行してきたが、以後は「総神元」となり、当時の四二軒すべてが神元をつとめる体制となった(図4)。この改変は、白鬚田原神社の同時期の改変とほぼ同じである。総神元となつて、神元組が組織され、この神元組が交替で祭り当番を担うことになった。総神元といいながらも、すべての家が個々に当屋を勤める体制にならなかった点も白鬚田原神社の場合と同じである。

最近の神元座の構成は表5に示すとおりである。一九七九年には一七の神元組があったが、「佐津ま園」に家がなくなってしまうので、現在は一六組となっている。田原若宮八幡社の神元組は文書に「屋敷名」

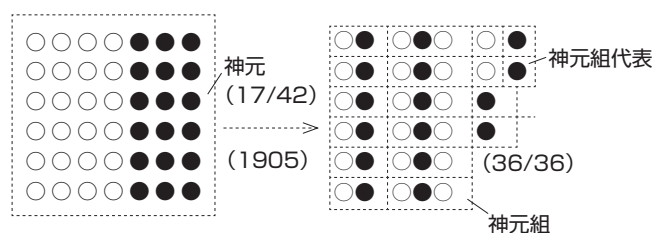


図4 神元から神元組へ

表5 神元組の構成

地区	番号	屋敷名	1979	2000
上園	1	十畠	2	1
	2	鍛冶屋敷	3	2
	3	庄屋園	3	2
	4	南の園	2	2
中村	5	中園	1	1
	6	となり屋敷	3	2
	7	くぬ木	3	3
	8	百迫	3	2
	9	びわ迫	3	2
下村	10	小迫	3	3
	11	蛭園	2	2
	12	新城屋敷	2	2
	13	瓦下	3	3
	14	上西	3	3
	15	山下	3	3
	16	佐津ま園	2	0
	17	花の木	3	3
計			44	36

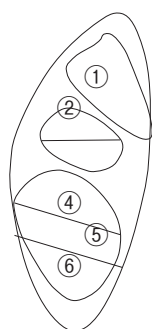


図5 祝元組順番

〈祝元組順番〉

①上園	7戸
②中村(上)	5
③中村(下)	5
④下村(上)	7
⑤下村(中)	6
⑥下村(下)	6

表6 神元組戸数

	1979	2000
①上園	3	6
②中村(上)	2	8
③中村(下)	1	2
④下村(上)	0	1
⑤下村(中)	4	3
⑥下村(下)	3	3
計	44	36

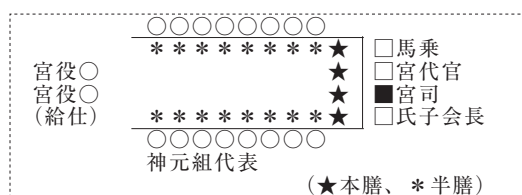


図6 〈神元組〉 (2000/11/03)

と記載されているように、同一の神元組を構成している家々は地理的に近接し、したがって神元組は地縁的な組織を構成している。この点は白鬚田原神社の神元組と異なる。これは、明治三十八年の改変時に旧来の神元と周辺の寄子（多くは分家筋の家）をひとつの神元組に組織したためと考えられる。神元組の範囲は、永松の村組（上園、中村、下村）を越えることはない。一九〇五年（明治三十八年）に神元組が組織されて以来、今日に至るまで再編成は行われていない。また、一九七一年までは神元組が交替で祭礼の当番を勤めていたが、一九七一年に新たに祝元組（当初は一〇組、現在は六組）が編成されて以降は、祝元組が当番をつとめることになった。これは神元組の戸数が過疎化などによってますます減少し、神元組単独では祭りの当番を実行できなくなったためである。

一九七九年以降の神元組は表5に示すように、一戸から三戸の家で構成されている。最近ますます戸数の減少が顕著になっている。一九七一年に組織された祝元組は、いくつかの神元組を地域的にまとめたものである。したがって、祝元組の地域的範囲もまた村組をこえることはない。現在の六組の祝元組は、五〜七戸で構成されている。祝元組は職の上げ下げ、神社の清掃など祭礼の下準備にあたる。とくに、祝元を特定することもなく、祝元の名はまさしく名ばかりになっている。白鬚田原神社の祝元に比べても、田原若宮八幡社の祝元には神聖性がほとんどない。

表7は、二〇〇〇年に行われた田原若宮八幡社の例祭の概要をしめしたものである。田原若宮八幡社の例祭は、一〇月二八日のハケオロシに

表7 2000年の儀礼過程

10/28	ハケオロシ	13:00	神事。拝殿。境内、辻、御旅所への注連縄張り。
10/30	潮汲み		豊後高田。宮代官1人。
02	餅搗き	8:00	宮役3人。餅搗き。「お京」など供物の準備。小餅作り。本膳・半膳。
	前日祭	15:17	神官、宮官、氏子総代など5名による拝殿での神事(15:35終了)。
03	禊ぎ	8:00	桂川のみそぎ場に御幣設置。神官、宮役2人による禊ぎ。
17	馬揃え神事	8:35	旧馬場→拝殿。膳は宮役が準備。馬乗役が参加。
18	例祭神事	13:00	拝殿下手→本殿に向かって正面。献饌。祝詞、玉串。撒饌。
19	神元座	13:44	社務所。神酒と甘酒のお下り、お上り。幣串の配布。拝礼。神幸依頼。
	神幸	14:02	神霊移し。御旅所までのご神幸、御旅所儀礼、村をまわる。神輿ぐり。
04	ハケアゲ	9:00	祝元組が集合。かたづけ。直会。宮役が祝元組を慰労する。

始まり、十一月四日のハケアゲをもって終了する。例祭は十一月二日、三日の両日に行われる。川での潔斎、神元座、神幸祭など白鬚田原神社の祭礼と共通する部分が多いが、かつての流鏑馬に関連すると思われる馬揃え神事は白鬚田原神社にはない儀礼である。また、田原若宮八幡社の例祭ではどぶろくではなく、甘酒が供えられ振舞われる。甘酒の調製は祝元組が行う。神元座は例祭神事の後に開かれ、神元座のあとに神幸祭が行われる。神元座は図6に示す形で社務所で行われる。神元座の参加者は一六の神元の代表者、宮司、氏子代表、宮代官など宮役三人である。神元組代表は一六人が必ず参加する。一六人が参加しなければ神元座が開催できないからである。宮司、氏子会長、宮代官、馬乗には本膳と呼ぶ膳が出される。神元組代表には半膳が出される。本膳は、おこわを固めたキョウ（京）、お杓形餅四枚、栗、柿、山芋、半膳はお杓形餅二枚とキョウである。給仕は宮役が勤めるが、甘酒の給仕は祝元組が行う。永松では神元座は神幸祭の開始を承

認する場とされ、神元座を経てはじめて神幸祭が行われる。この意味では神元座は単なる直会ではない。

宮座組織を中心に、白鬚田原神社と田原若宮八幡社の宮座組織と祭礼の概要について述べてきたが、祭祀組織の変化として注目されるのは、両者とも明治末期の改変にともなう株座から村座への変化、つまり神元が担ってきた祭祀形態を廃止して、神元組による祭祀に変化した点である。神元の拡大を神元組という組織することによって実行した点にこの改変の大きな特徴がある。この背景には、有力家の衰退があったものと思われるが、こうした改変は近畿地方の宮座の変化とは明らかに異なる。さらに、この改変によって神元組が編成されたが、祭祀の中心となる祝元の祭祀的役割の変化、神聖性の衰退を引き起こした。とくに、田原若宮八幡社の場合は、大正末期から宮役と呼ばれる神社役員によって、祭祀が行われるようになり、むしろ宮役の方に神聖性が付与されることになったといえよう。

④「当屋制」の類型と地域性

これまで中国地方の広島県三原市山間部の久井稲生神社の宮座、北部九州国東半島の白鬚田原神社と田原若宮八幡社の宮座組織について分析してきたが、ここではこのほかの事例を含めて、宮座における当屋とは何か、当屋制の比較、および現代における宮座の変化について、総括的に考察してみたいと思う。

(1) 当屋とは何か

宮座を内部構造から規定しようとする場合、当屋の問題、つまり「当屋とはなにか」は重要な問題である。肥後和男〔一九四〇〕が指摘するように（表8）、宮座には、祭儀を司る神主と共同飲食や祭礼の準備に

表 8 宮座の主宰者と舗設者 (肥後和男 (1941)『宮座の研究』)

主宰者	神主	祭儀を掌る	献燈、献饌、祝詞奏上、神殿並境内の清掃
舗設者	当屋	共同飲食の準備	御幣、神酒、神饌

表 9 神主と当屋の多様性

	神主	村神主	座管理者	当番神主	当屋
滋賀県東近江市青山	○	—	—	○(当屋を兼ねる)	
滋賀県野洲市三上	○	—	○	—	○
奈良県室生村多田・染田	○	○(一老)	—	—	○
奈良県天理市荒蒔	○	○(村神主)	—	—	○
広島県久井稻生神社	○	—	○	—	○
大分県杵築市永松	○	○(宮役)	—	○(かつては当屋を兼ねる)	

当たる当屋が存在する。肥後和男の用語に従うなら、前者は宮座の主宰者であり、後者は舗設者である。しかし、この両者は多様な形で存在し、両者が明確に区分されるわけではない。

表9は、これまで調査した宮座における主宰者と舗設者を一応整理したものである。この表によれば、主宰者と舗設者の存在形態は、五つに分類できる。第一は職業神主、第二はいわゆる村神主である。村神主と

いう名称はまだ熟していないが、氏子の中からある程度の期間、固定して祭礼を司祭する役割であり、奈良県では「一老」「宮年寄」などと呼ばれている。これは毎年交替する当番神主とは別である。第三は、座の管理者である。座の管理者は座の当番帳を管理したり、毎年の当屋を決定するなど座全体の運営を管理する役割を果たす。滋賀県の御上神社の宮座では「公文」、広島県の久井稻生神社では、「座頭」「触頭」と呼ばれるのがこれである。座の管理者が存在する御上神社と久井稻生神社の宮座は複数の座によって構成されており、複数の座の存在が座の管理者を必要にしているといえよう。第四は、当番神主であり、一年神主、年番神主と呼ばれることも多く、一般的には毎年交替する。氏子が交代で祭祀を司る神主を勤めるから、この当番神主は神主の古い形態をとどめているのかもしれない。当番神主を滋賀県青山では当屋と呼び、祭祀の準備役も兼ねている。第五の当屋は、祭祀のさまざまな準備に当たる役であり、これが当屋と呼ばれるのが一般的である。当屋が主宰者の役割を果たすことは、基本的にはない。この五つの主宰者と舗設者の存在形態をみると、職業神主と、当番神主もしくは当屋が宮座に必須であることがわかる。ただし、当番神主と当屋を別々にしている宮座はない。

ここで当屋とは何かという問題にたち戻ると、当屋とは、祭祀において舗設的役割を担う家(家族、者)が一般的であるが、宮座の主宰者としての一定の役割を果たす当屋もある。したがって、宮座組織において当屋とは、主宰者もしくは舗設者の役割を担う家(家族、者)であって、しかもこれを交替で勤める場合と規定したい。「頭屋」ではなく、「当屋」の用語を使うのは、順番に交替で役を勤めるところに宮座の本質がある、ことを強調する意味である。また、すでに触れたように、宮座の本質は長期的な対等システムであると考えるので、短期的な長を意味する頭屋は採用しないことにしたい。また、祭儀を司る役割が職業的神主に移行しつつある現在、当屋の役割は、限定的な司祭的役割か供物、神饌の調

製などの役割に限定される傾向がある。当屋を単なる祭礼当番と区分するためには、一定の神聖性が備わった当番を当屋と考えることが重要である。オハケなどの依代、湯立などによって当屋に神を迎えたり、当屋の空間に注連縄をかけたり、襖ぎによって身体を清めたりすることなどが、当屋の神聖性を確保する手段として各地の宮座に認められる。こうした神聖性を持った役割を当屋とし、この当屋をメンバー間で順番に回して行くのが当屋制である。

(2)「家当屋制」と「組当屋制」

つぎに近畿地方の宮座と中国・九州地方の宮座の構造的差異について検討してみよう。表10はこれまで調査した各地の宮座を比較したものである。まず、滋賀県・奈良県など近畿地方の宮座は、宮座の種類、座数、当屋順序などには細かな差異は見られるが、第一に、宮座の構成単位が家であり、当屋の順番は直接、家々の順序として規定されていること。第二に、当屋の回転期間が比較的短く、ほぼ一世代に一回、当屋が回ってくることを基本に宮座の構成戸数や座の数が定められていること。したがって、戸数が増加した場合、座の中に上座・下座を設定するなどして、一世代に一回の原則を保持しようとする傾向が強い。

これに対して、中国地方の宮座について、さきに示した広島県の久井稲生神社および岡山県阿哲郡神郷町高瀬（崔杉昌氏調査）、山口県防府市春日神社（市川秀之氏調査）、岡山県建部町の名主座（蘭部寿樹氏調査）などの宮座を比較分析すると、ほぼ共通する特徴として以下の諸点を指摘することができる。第一に、固有名詞をもつ「名」ないし「名」に類似する社会組織を基盤としていること。したがって、宮座メンバーは名の代表としての性格をもつから名の中で宮座メンバーの交代（譲渡、売買による交代も含む）がしばしば見られること。つまり、宮座は名の集合体として成立していると考えられること。また、宮座メンバーの数は

名の数に規定されること。第二に、名の中で特定の「名」が優越した地位を持つこと。第三に、「名」によって神前の着座位置が固定している例が多いこと。第四に、神官・社家などは別に座を構成する例が多いこと。第五に、名主―寄子関係が認められること。第六に、当屋制を規定する原則として年齢の要素が見られないこと。これは近畿地方の宮座とは大いに異なる。第七に、最近、座の権利の譲渡、売買がみられることなどである。このような中国地方の宮座を見ると、個々の家が直接メンバーとして規定されているというより、「名」を基盤として家が規定されているという性格が強いといえよう。名に名前がつけられ、それが宮座のメンバーの名前として意識されている側面が強い。

また、北部九州、国東半島の二つの宮座にもほぼ共通した特徴がみとめられる。第一に、この地域の宮座は、一八軒前後の有力家によって構成され、有力家は地域的に近接する分家などを寄子として、順番の祭祀当番を勤めていたが、明治後期に有力家が衰退すると、寄子などとともに神元組を構成し、以後は神元組を単位に祭祀当番が決められた。第二に、神元組の中で、特定の家に当屋が回ってくる期間が、五―六〇年から長い場合は一〇〇数十年に及び、近畿地方に見られるような一世代に一回という観念はない。家の当屋順序が直接規定されていない点も中国地方の宮座と共通する。第三に、当屋制の原理として年齢の要素がまったくみられない。宮座の当屋を決定する際に家並みや年齢など個々の家や家族員の属性はまったく問題とならないのである。

こうした近畿地方の宮座と中国地方、北部九州の宮座の差異を構造的にとらえる当屋制の種類概念として、「家当屋制」と「組当屋制」の概念を提示したい（表11）。家当屋制とは、宮座のメンバーである家々の当屋順序を直接指定するような原理にもとづく当屋制であり、近畿地方の当屋制はこれにあたる。これに対して、組当屋制とは当屋順序がそれぞれの宮座メンバーの順序として直接指定しないで、地域、組などの順

表 10 当屋制の比較

県 名	滋 賀 県		奈良県	広島県	大分県
村落名	三上 (171)	青山 (46)	荒蒨 (45)	久井	国東大田村
類型	村座	村座	株座	株座	株座→村座
双分制	長之家・東・西	(一座)	(一座)	(見子座、東、西)	(一座)
村神主	――	――	固定	――	宮役(選出)
当屋順序	一定順序、親死亡順等	年齢順	帳簿順	一定順序	当屋組内の順番
祭費負担	当屋	宮座	当屋	宮座・当屋	集落
神田	なし(秋祭)	村→個人	村	今はなし	なし
当屋制	家当屋制	家当屋制	家当屋制	組当屋制	組当屋制

表11 家当屋制と組当屋制

類型	意味	分布地域
家当屋制	家々を直接指定する原理にもとづく当屋制 (家並順、帳簿順、年齢順、親の死亡順など)	近畿地方の宮座
組当屋制	基本的に組を巡回し、組のなかの家を間接的に指定する当屋制。	播磨以西の中国地方の宮座 九州北部(国東半島)の宮座

序に従って当屋の順序が間接的に規定している当屋制であり、兵庫県播磨地方以西の中国地方の宮座、北部九州国東半島の宮座がこれにあたる。同じように組当屋制であっても、久井稲生神社の宮座は名を基盤とする宮座であるのに対して、国東東半島の宮座は当屋順序が村組を媒介として決定される点に特徴があり、構造がまったく同じというわけではない。

その内容についてはこれまで見てきた通りであるが、この二つの当屋制が地域を別にして存在していること、また、宮座組織の変化のあり方がこの二つの当屋制の間で差異がみられることなどから、宮座を地域的構造的にとらえる概念として有効性を持つばかりでなく、宮座の変化を明らかにする枠組としても有効性を持つと考える。

5 結語

本稿は、主として西日本地域に神社祭祀組織として広く分布する宮座について、とくに中国地方と北部九州の宮座を取り上げ、これを近畿地方の宮座と比較分析して、宮座の構造とその地域的変差を明らかにするとともに、宮座の現代的变化についても考察しようとするのが目的であった。ここでは本稿の冒頭で提起した三つの課題についての考察を要約して結びにかえたいと思う。

第一は、宮座の概念についてである。これまでの宮座研究において、宮座の概念は実にさまざまであった。宮座の概念規定の方法には二つの流れがあったが、その多くは宮座を外面、すなわち、どのような家や個人が宮座を構成しているかに注目し、これを特権的祭祀組織として規定するものであった。この概念規定は、宮座を通して村落の階層構造や支配構造を明らかにするには、有利であった。しかしながら、一定の人々が構成する宮座がどのような内部構造を持ち、どのような機能を果たすかについては必ずしも明確ではなかった。そこで、内面から、すなわち宮座の内部的な構造に立ち入って宮座を概念規定する必要がある。宮座を内面からはじめて概念規定を試みた肥後和男(一九四〇)は、宮座を「神事組合」規定した。本稿では、肥後和男の考え方を継承しながら、宮座は家を基本的単位とする祭祀組織であること、「株座」も含

めることを前提として、宮座をつぎのように概念規定した。宮座は「一定の地域社会において当屋制を原理とする神社祭祀組織」である。宮座の内部構造に注目すれば、宮座は株座の形態をとるにせよ、また村座の形態をとるにせよ、宮座は構成単位としての強固な家の独自性を基礎としながら、対内的な家相互の平等性・対等性と、対外的な封鎖性排他性（ときには秘儀性）を特徴とする祭祀組織であると規定できよう。

第二は、宮座の地域的多様性の問題である。広島県の宮座や国東半島の宮座を調査しているうちに、この地域の宮座がかねてから調査を進めてきた近畿地方の宮座と構造的にかなり違うのではないか、と思い始めた。これが本稿において宮座の多様性を考察するきっかけであった。宮座の地域的類型として、本稿では「家当屋制」と「組当屋制」を提示して、具体的にその差異を明示した。家当屋制とは、宮座のメンバーである家々の当屋順序を直接指定するような原理にもとづく当屋制であり、近畿地方の当屋制はこれにあたる。これに対して、組当屋制とは当屋順序がそれぞれの宮座メンバーの順序として直接指定しないで、地域、組などの順序に従って当屋の順序が間接的に規定している当屋制であり、兵庫県播磨地方以西の中国地方の宮座、北部九州国東半島の宮座がこれにあたる。

第三は、宮座の現代的变化の問題である。現代の宮座は社会の激しい変化のなかで、さまざまな変化を経験してきた。中世に生まれた宮座は、近世、近代、そして戦後社会と、常に変貌を余儀なくされたといっても過言ではない。中国地方や国東半島の宮座を通して明らかなのは次の諸点である。ひとつは、とくに人権思想・平等思想の普及による株座から村座への変化である。国東半島の宮座では明治末期からこの変化が見られた。ひとつは祭祀費用負担方法の変化である。特定の当屋が負担する「当屋負担型」から、全戸で平等に負担する「宮座負担型」への変化である。当屋そのものの設定にも最近是否定的な地域もある。

このように、現代の宮座は過疎化、耕地整理、非農業化、人口減少、人権意識の普及などによって激しい変化を経験している。宮座への関心が希薄となり、また参加が著しく減少するなど、宮座組織の空洞化と儀礼の簡素化は急激に進行している。最近消滅した宮座も数多く、危機的局面を迎えている宮座も多いのが現状である。現代の宮座研究は今後ともこの宮座の現実を直視しなければならない。

参考文献

- 文化庁（一九七二）『日本民俗地図』三（玉浦護）
古野清人（一九四〇）『筑前宗像の宮座資料』『民族学年報』二二・二〇～一四一
藤井昭（一九七二）『杭庄と宮座』『広島県文化財ニュース』二頁～四頁
藤井昭（一九八〇）『備後久井稲生神社の宮座の「名」について』『日本民俗学』二二七・一七～三二
藤井昭（一九九五）『秋祭りの変遷』『芸備地方のまつり』、一七一頁～一七四頁
福田アジオ（一九九五）『宮座の意義と村落類型論』『歴史手帖』一七（一一）：一二～一五
福田アジオ（二〇〇〇）『宮座』『民俗大辞典』
萩原龍夫（一九七二）『宮座』『日本民俗事典』六九四頁～六九五頁
記録映画社（二〇〇〇）『国東の神まつり』（民俗文化財映像資料）
広島県神社誌編纂委員会（一九九四）『広島県神社誌』広島県神社庁
久井稲生神社（一九六八）『宮座「御神酒献備之古式」』（詳解）久井町文化財協会
久井町誌編纂委員会（一九九七）『久井稲生神社の祭礼』『久井町史』、二二五頁～二四九頁
御調郡教育会（一九二五）『稲生神社』『御調郡誌』四二九頁～四三二頁
中山太郎（一九二四）『宮座の研究』『社会学雑誌』六
桜映画社（二〇〇五）『久井稲生神社の御当行事』（民俗文化財映像資料）
高橋統一（一九七八）『宮座の構造と変化』
上野和男（一九八〇）『御上神社秋祭の構造と親族組織』『近江村落社会の研究』五・三七～五一
上野和男（一九八二）『御上神社秋祭における頭屋の役割—昭和五四年東座頭屋の「神事記録帳」から—』『近江村落社会の研究』六・四六～六三
上野和男（一九八七）『近江湖東における宮座の組織と儀礼—滋賀県愛知郡愛東町青山の事例—』『国立歴史民俗博物館研究報告』一五・三〇一～三三三

上野和男（一九九一）「近江中山の芋くらべ祭」『国立歴史民俗博物館研究報告』三二・一四一―一四九（岩本通弥・橋本裕之と共著）

上野和男（一九九二）「荒時の神社祭祀と社会構造―宮座・家族・村落組織を中心として―」『国立歴史民俗博物館研究報告』四三・二四五―三二〇

上野和男（二〇〇四）「奈良県東北部村落における宮座の組織と儀礼―室生村多田・染田を中心に―」（『国立歴史民俗博物館研究報告』一一二・三二五―三三〇）

（国立歴史民俗博物館研究部）

（二〇〇九年〇月二日受付、二〇一〇年五月二五日審査終了）

***Miya-za* Studies: Past and Present : Concept, *To-ya* System, and Change**

UENO Kazuo

This article studies *miya-za*, which is spread widely as an organization for religious services in Shinto shrines mainly in the western part of Japan. It deals particularly with *miya-za* in the Chugoku area and northern part of Kyushu, and analyzes them by comparison with *miya-za* in the Kinki area, aiming to clarify the structure of *miya-za* and its regional variations and also examine the modern changes of *miya-za*.

The first discussion in this article focuses on the concept of *miya-za*. The study discusses the internal structure of *miya-za* to define its concept. *Miya-za* is defined as an “organization for religious services in Shinto shrines on the principle of the *to-ya* system in certain local communities.” Paying attention to the internal structure of *miya-za*, whether it takes the form of *kabu-za* or *mura-za*, *miya-za* may be defined as an organization for religious services with the characteristics of internal equality among houses and external closure and exclusiveness (sometimes secrecy).

The second discussion focuses on the problem of the regional varieties of *miya-za*. This article presents the “*ie to-ya* system” and “*kumi to-ya* system” as regional types of *miya-za*. The *ie to-ya* system is a *to-ya* system on the principle of direct assignment of member houses of *miya-za* for the turn of *to-ya*. This *to-ya* system is seen in the Kinki area. On the other hand, the *kumi to-ya* system does not assign directly each member of *miya-za* for the turn of *to-ya*, but determines indirectly the turn of *to-ya* according to the order of region, *kumi* (group), etc. This system is seen in the Chugoku area from the Harima area in Hyogo to the west, and in the Kunisaki Peninsula in northern Kyushu.

The third discussion focuses on the modern change of *miya-za*. The following points are clarified through *miya-za* in the Chugoku area and the Kunisaki Peninsula. One is the change from *kabu-za* to *mura-za* particularly by the spread of the ideas of human rights and equality. The other is the change of the method of bearing the cost of festivals. It was changed from the “*to-ya* burden type” (a particular *to-ya* bears the cost) to the “*miya-za* burden type” (all houses bear the cost equally). The modern *miya-za* studies must continue to examine the severe reality of *miya-za*.

Key words: Organization for religious service in Shinto shrines, *Miya-za*, *To-ya* system, *Ie to-ya* system, *Kumi to-ya* system
